書き抜き読書ノート 2073　　2015 年 5 月 6 日

モンゴメリ著、村岡花子・美枝・恵理訳「炉辺荘のアン―赤毛のアン・シリーズ 7 ―」新潮文庫、新潮社 2008 年 3 月 20 日刊を読む

炉辺荘のアン

１．アンは眠くなかった。あまり幸福なのでまだ眠れなかった。静かに部屋を動きまわりながら、物を片づけたり、髪を編んだり、愛される女の幸福に酔っていた。ついに寝間着に着がえると広間を横切って男の子たちの部屋へ行った。ウォルターとジェムは自分たちのベッドにはいっており、シャーリーは子供用寝台でぐっすり眠っていた。いたずらな子猫の時代をすぎてしまったシュリンプは家族の習慣のようなものになっており、シャーリーの足もとにまるくなっていた。ジェムは『ジム船長の生活手帳』を読んでいるうちに眠ってしまっていた……本は掛布団の上に開いていた。おや、布団に寝ていると、ジェムはなんて長く見えることだろう―　もうじき大人になるのだ。なんとがっしりした、頼もしい男の子だろう―　ウォルターは美しい秘密を知っている者のように眠りながらほほえんでいた。月は鉛をかぶせた窓の格子からウォルターの枕にさしており……ウォルターの頭の上の壁にくっきり十字架の影を投げていた。ながい年月がたってからアンはこのことを思い出し、それがロースレットの戦場での悲劇を不吉に暗示していたのではなかったか、『フランスのどこか』にある有名な墓の十字架の写しではなかったかと考えた。しかし、今夜はそれは一つの影にすぎなかった……それだけのものであった。発疹はシャーリーの首からすっかり消えていた。ギルバートの言うとおりだった。ギルバートの言うことはいつもまちがいないのだ。

２．ナンとダイアナとリラがその隣の部屋にいた……ダイアナはかわいい湿った巻毛を頭じゅうにひろげ、小さな日に焼けた片方の手を頬の下にいれていた。ナンの長い扇のようなまつげは頬にふれんばかりだった。青い筋のういている目蓋の奥の目は父親似の褐色だった。リラはうつ伏せになって寝ていた。アンが上向きになおしたが、ぴっちりつむった目は開かなかった。

３．子供たちはみなどんどん成長していく。あとわずか数年でみんな若い男や女になるのだ……爪立ってくる青春……期待にみちて……美しい、奔放な夢でにぎわい……小さな船は安全な港から見知らぬ国へ出かけていくのだ。男の子たちはそれぞれの生涯の仕事をめざしていくし、女の子たちは……ああ、霞のようなヴェールをつけて美しい花嫁姿が炉辺荘の古い階段をおりてくるのが見られることだろう。しかし、まだあと数年はあたしのものなのだ……愛し、導き……多くの母親が歌ってきた歌をうたってやり。あたしのものであり……ギルバートのものだ。

４．アンは部屋を出て広間の出窓のところへ行った。すべての疑惑や嫉妬や憤りは上弦の月の行くところへ行ってしまった。アンは自信を感じ、陽気な、快活な気持になった。「ブライス(快活な)―　あたしはブライスだわ」と、アンはこのばかげた小さな洒落を笑った。「パシフィックがあたしにギルバートが『もちなおした』と言ったあの朝のような気持がするわ」

５．目の下には神秘的な美しい夜の庭がひろがっていた。月光につつまれた遠くの丘は詩のようであった。幾月もたたないうちに、アンは遠くかすむスコットランドの丘の……メルローズの……荒廃したケニルワースの……シェイクスピアが眠るエイヴォン川のほとりの教会の……おそらくコロセウムの……ギリシャの城 砦の……滅びた数々の帝国のそばを流れる悲しげな川の上の上の月光をながめることだろう。

６．涼しい夜だった。まもなくもっときびしいもっとつめたい秋の夜が訪れることだろう。やがて深い雪が……降りつもる白い雪が……深い冷たい冬の雪が訪れ……風と嵐の猛り狂う夜がくるであろう。しかし、だれがそんなものを気にかけようか？　祝福にみちた部屋には炉火が魔法をつかう……このあいだもギルバートが暖炉に燃やすりんごの木を手に入れると言っていたではないか？それは来るべき灰色の日々を明るくすることだろう。愛があかあかと燃え、春を前にひかえているというのに、なんで吹き寄せる雪や刺すような風を気にかけることがあろう？　そして人生のあらゆる小さな美しさが道にふりまかれているのに。

７．アンは窓から離れた。髪を二本の長い三つ編みにし、白い寝間着を着た姿はグリン・ゲイブルス時代のアン……レドモンド時代のアン……『夢の家』時代のアンそのままであった。内なる輝きはいまだにさし出ていた。開いている戸口から子供たちのやわらかな寝息が聞こえてくる。めったにいびきをかかないギルバートはいまは疑う余地もなくいびきをかいていた。アンはにやっと笑った。クリスチンの言ったことが思い出された。かわいそうな子供のいないクリスチン、嘲　笑の小さな矢を放ったりして。

８．「なんという大家族だろう―　」
　と、アンは勝ち誇った調子で繰り返した。

P570 ～ 574

［コメント］
　モンゴメリの名著、村岡花子、村岡美枝、村岡恵理訳「赤毛のアン」シリーズ第７巻、「炉辺荘(イングルサイド)のアン」。子どもたちとの心暖まる生活を子どもたちの立場からも書きつづった物語。是非、御一読を。

― 2015 年 5 月 6 日　林　明夫記―